

教員名	小牧幸代	所属学科	観光政策学科
<p>【ゼミでは何を学ぶのか】</p>			
<p>本ゼミでは、文化人類学の理論的枠組みと方法論にもとづいて、世界各地の社会・文化に固有の生活のあり方を理解するとともに、グローバル化がすすむ諸問題のなかにそれらを位置づけ直し、生活様式や価値観の多様性や創造性、あるいは混交のあり方などを考えていきます。多様な生活様式や価値観を「他文化」のものにとらえるのではなく、身近な例と比較する視点をもつことで「自文化」を振り返るきっかけをつかみます。</p>			
<p>3 年次の演習 I は、自分にとっての「他文化」探しから始まります。ここでいう「他文化」は、なにも外国の文化とはかぎりません。それは、国内・地元・自宅で見つかるものかもしれませんし、趣味サークル・インターネット・書物・映像のなかに見出せるものかもしれません。そうした「他文化」すなわち「自分（の感覚）とは違う」と感じるヒト・モノ・コトを発見することができたら、今度はそれを文化人類学の理論と方法に基づいて調査し、整理し、分析し、表現し、議論・討論し、最終的には文章化する力を養います。文化人類学の理論と歴史、調査研究の方法は、主として教科書の輪読を通じて習得します。個人研究は、その成果を自分のテーマに結びつけて展開することになります。発表時の活発な意見交換は議論・討論の技術向上を促し、3 年次論文の執筆は思考の整理とその言語化の訓練につながるでしょう。</p>			
<p>4 年次の演習 II では、演習 I の成果を踏まえて基本文献を輪読し、ヴァージョンアップした個人研究発表を試み、その結晶化としての卒業論文作成に取り組みます。論文の作成にあたっては、内容だけでなく形式も重視し、自分の主張を正確に確実に言語化し伝達できるよう技術的な訓練をおこないます。たとえば、「1. はじめに」では①問題提起、②目的と意義を明確に示し、「2. 本研究の位置づけ」では①先行研究レビュー、②方法（文献調査または現地調査の詳細）、③予想される結果（仮説）、④全体の構成を明らかにし、「3. ～5. 現地調査・文献研究に基づく事例部分」では、たとえば「3. 調査地概況または研究対象概要」「4. 事例 1」「5. 事例 2」などを具体的に紹介し、「6. 考察」を経て、「1. はじめに」に対応した「7. おわりに」で閉じられるような論理の一貫した文章を書くことを目指します。</p>			
<p>【どのように学ぶのか】</p>			
<p>演習 I 前半 (3 年次前期) の課題</p>			
<p>1) 基本文献輪読（レジュメ）～2 年生後期実施プレゼミの続き。 2) 自分史発表（パワーポイント）～単なる自己紹介にとどまらず、今の自分を、今の自分が、どのように理解し、表現し、演出するか…その試論としての自分史。たとえば、関心のあるテーマについて述べ、そのテーマに関わるヒト・モノ・コトとの出会い、その後の関わり合いの歴史、そして現在に至ってそのヒト・モノ・コトとどのようにつきあっているか…といった順序で作成することが望ましい。つまり、なぜソレに関心をもつ今の自分になったのか…に関する私的歴史観＝想像／創造された自分像の紹介であることを忘れずに！</p>			

3) 個人研究発表 (レジュメ or パワーポイント) ～①進級論文計画&マイ必読文献のピックアップ、②マイ必読文献から数冊を選んで文献研究報告、③夏季休暇中の現地調査&文献研究の計画発表。

演習Ⅰ後半(3年次後期)の課題

1) 個人研究発表 (レジュメ) ～①夏季休暇中の現地調査&文献研究の成果報告、②進級論文全体構想 (仮のタイトルと章立ての発表)、③進級論文中間発表 (章立ての精緻化と具体的な事例分析)、④進級論文仕上げ (最終的なタイトル&章立てと結論・序論・要旨の発表)。

2) 進級論文は12月最後の演習時に原稿を提出し、冬季休暇中に各人で全員分に目を通し、1月に意見交換ののち改訂して最終稿を完成させ、論文集編集作業を経て2月上旬に論文集発行の予定です。1月は、進級論文にもとづいたプレゼンの練習にも取り組みます。論文とは異なり、トピックをかなり絞りこんで短時間(10分程度)で効果的に伝える技術を養います。

演習Ⅱ前半(4年次前期)の課題

1) 基本文献輪読 (パワーポイント) ～議論・討論がメイン。担当部分の要点を抽出し、関連するトピックを収集して話題提供。

2) 個人研究発表 (レジュメ) ～①進級論文自己評価&卒業論文計画&マイ必読文献のピックアップ、②マイ必読文献から数冊を選んで文献研究報告、③夏季休暇中の現地調査&文献研究の計画発表。

演習Ⅱ後半(4年次後期)の課題

1) 個人研究発表 (レジュメ) ～①夏季休暇中の現地調査&文献研究の成果報告、②卒業論文全体構想 (仮のタイトルと章立ての発表)、③卒業論文中間発表 (章立ての精緻化と具体的な事例分析)、④卒業論文仕上げ (最終的なタイトル&章立てと結論・序論・要旨の発表)。

※収集した事例をできるだけ具体的に呈示し、分析し、結論を導き出すことで、当初の問題意識・問題設定を再確認もしくは修正するよう心がけてください。とくに「事例に語る」工夫を!

2) 卒業論文提出後、冬季休暇中に各人で全員分に目を通し、1月に改訂して最終稿を提出し、論文集編纂作業を経て2月上旬に論文集発行の予定です。1月は、卒業論文にもとづいたプレゼンの練習も試みます。論文とは異なり、トピックを絞って短時間で効果的に伝える技術を養い、卒業論文発表会に向けて準備します。

※以上のような演習での一連の作業は、「問題発見」「問題解決」の方途を見出すことにつながり、近い将来、別の機会にも適宜応用することができるでしょう。

【学んだことはどのように生かせるのか】

演習Ⅰの達成目標 輪読および自分史・個人研究の発表を通じて、資料検索と現地調査の方法・実践、効果的なレジュメとパワーポイントの作成・使用、議論・討論のス

キルなど、学問の技術的側面の不可欠な部分に磨きをかけます。同時に、自分にとっての「他文化」に関する調査研究の成果を1本の論文にまとめることで、自分の「自文化」観を認識し、自分史的ななにかを確認します。「他文化探し」は「自分探し」でもあるからです。

演習IIの達成目標 4年次は、個人研究テーマにそくした現地調査・文献研究をいっそう深め、その成果を発表（中間報告）し、全員で議論・討論を重ねながら卒業論文の作成に取り組むことで、事例（知識・情報・資料）の整理と分析、問題意識と結びついた仮説の提示と検証、導き出された結論の口頭および文字の両面における言語化、論理の一貫性の追求といった学問の技術的側面のレベルアップを図ります。

【おすすめの入門書・基本テキスト】

山下晋司・船曳建夫（編著）『文化人類学キーワード 改訂版』有斐閣双書
綾部恒雄・桑山敬己（編著）『よくわかる文化人類学（第2版）』ミネルヴァ書房
山下晋司（編）『観光文化学』新曜社

【まだ見ぬ君へのメッセージ】

高校では「伸びしろ」の大きい不得意科目を克服するよう指導されていると思いますが、大学では「無限の伸びしろ」がある得意なことに力を注ぎます。でも、それが本当に得意なのか不得意なのかは、実は、とことんまでやってみないと分からないものです。真の意味での得意を探し出すために、苦手意識を持っている教科にも、高校生である今のうちに、ぜひ挑戦しておいてください。長い目で見れば、すべての学びと経験は、決して無駄にはならないのです。

さて、大学での勉強や研究を通じて無限に伸びていく「得意」は、あなたをオンリーワンの存在にし、スキマ産業とマイ・スキルの開拓につながっていきます。そこに至るまでには、しかし、日々の努力が不可欠です。勉強の時間だけでなく、日常生活においても、新聞、雑誌、テレビ、インターネット、小説、映画、家族や友人との会話など、いつでもどこでも、発見や気づきがあったときには一冊のメモ帳に、なんでも記録していくのです。

文化人類学では、この種のメモ帳を「フィールドノート」と呼びます。私の場合、インド・パキスタンのイスラーム社会で調査を開始した時、最初はまったく意味不明だったけれども気になったことや思いついたこと、ささいなことをどんどんメモしていきました。1ヶ月、半年、1年が過ぎ、メモ帳が6冊になったとき、改めて最初から読み直すと、それまで理解できなかったことが、あちこちでつながり、意味をなすものとして浮かび上がってきたのです。

文化人類学を専攻する研究者は、これを「民族誌」や学术论文というカタチにします。ゼミ生も、フィールドノートを片手に日々、メモをとり、進級論文や卒業論文の作成に役立てています。高校生のみなさんの場合でも、発見や気づきの蓄積が、単なる得意を意味のある得意に変え、最終的に「カタチあるもの」に結実するのではないのでしょうか。本ゼミでは、みなさんの得意にもとづくネタの蓄積から生まれたオリジナルな視点が、「カタチ」をあらわすまでのサポートをしたいと考えています。